

余計なお世話を始めよう

5月5日、「こどもの日」だからという理由ではないが、ぼくはオフ。10時過ぎに起き出して新聞を広げると、社会面に海と山との事故が大きく報道されていた。海の方は上越市の海岸で、波打ち際で遊んでいた小学生3人が突然の高波にのまれ、助けようとした父親ともう一人の男性も引き込まれて、5人が死亡したというもの。山の方は、「北アルプスなど登山の6人死亡」という見出しで、白馬岳、雄山、富士ノ折立、八ヶ岳・赤岳、川上岳、丹沢・大山で低体温症や滑落で死亡という記事があり、別に「お鉢巡り中の男性、富士山火口に転落」という見出しで、助け上げたが心肺停止状態とあり、救助活動を手伝った別の男性が滑落して行方不明になっている。

手元にある日本山岳会会報14年4月号の巻頭記事に、「山岳遭難が急増！4年連続で最多更新」とあって、長野県山岳遭難防止対策協会のレポートが掲載されていた。

記事の冒頭には、登山愛好者の集まるイベントで出したクイズの紹介。「平成24年に長野県で山岳遭難があったその日の天候は？」というもの。雪の日、雨の日、晴れの日を三択方式で選んで貰った結果は、雪の日と雨の日、即ち悪天候が遭難の原因と考えた人が57%、晴れの日と答えた人が43%で、遭難＝悪天候というのが一般的な見方のようだ。正解は晴れの日。長野県で発生した山岳遭難の約8割は晴れや曇りの日に発生しているという。長野県では、転倒・滑落・転落が県内事故の6割を占めている。心疾患による事故も増えているとか。

考えてみると、悪天候は事故を惹起する大きな要因となるが、悪天候下で登山する人は少ないはず、事故件数も多いはずがない。天気が良いければだれもが予定通りの登山を実施する。登山者が多いのだから、事故件数も多くなるだろうことは容易に想像がつく。天気が良いから楽しくて、頑張っちゃう。それで体力を消耗する。体力・脚筋力を消耗すれば下山時に転倒・滑落・転落などを惹起するのは自明、心疾患も起きる。長野県で発生した事故の8割が晴れや曇りの日であるという理由であろう。

増加する山岳遭難事故を、どうしたら防止することができるのか。安心して登山を楽しむために必要なものは、体力・技術・装備、そして仲間である。昔は登山するのに仲間の存在は当然であったが、情報化社会で人間関係が希薄になっている現在、仲間の確保は非常に難しい。山岳遭難防止に必要なのは、余計なお世話をしてくれる仲間の存在ではあるまいか。「一人じゃダメだぞ」「軽アイゼンじゃなくて12本爪を持って行け」「君の技術じゃ無理、ワンランク下げた方がいい」「もっとゆっくり」、鬱陶しいと思っても、窮地に歯止めをかけてくれるのは生の一言。インターネット情報では、歯止めはかからない。

その一言を言ってくれる仲間のいる場作りが、いまの登山界には急務である。